

寺報

報恩講

平成二十九年十一月

第七十八号

正念寺護持会発行

常陸太田市久米町二十一

電話〇二一九四一七六一一〇五八

FAX〇二一九四一七六一〇一六九

この「報恩講」は、浄土真宗各派のお寺では全国各地で行われ、呼び方も「お七夜（しちや）」「お取越（とりこし）」「ほんこさま」などと地域によつても色々です。昔は地域全体のお祭りとしても親しまれておりました。お寺の参道にたくさんの屋台が出て、お寺には女性たちが集まつて「お斎（とき）」という食事を用意。大人にとつても、子どもにとつても、「年に一度のお楽しみ」だったようです。この辺りだと秋から冬にかけて行われる「報恩講」は、親鸞聖人のご命日の法要で、親鸞聖人の遺徳をしおびつつ共に仏法を聞いて語り合う集まりであり、私が生きてきた中で受けた沢山の「ご恩」に「報いる」ひとときでもあります。

この「報恩講」は、浄土真宗では最も大きな、そして大事な法要であり、如信上人（親鸞聖人の孫・本願寺二世・正念寺の開基でもある）は、存命当時に住まっていた陸奥国大網（現福島県石川郡古殿町辺り）から毎年十一月には、京都大谷の親鸞聖人の御廟に参り「報恩講」をお勤めされていましたと伝えられています。当時の事を考へると、福島から京都への往復だけでも大変で

現在のように会社の仕事や日常の生活に追われている時代では、一晩を一緒に過ごしながら語り合うという事もなかなかできることでは無くなつておりますが、それでもいまだに一晩かけて通夜布教をされているお寺もありますし、ご本山では当然毎年一月十五日の晩から十六日の朝にかけて通夜布教をされております。そのご本山では、九日の午後（逮夜法要）から十六日の午前（日中法要）まで一週間かけて「報恩講」が行われます。この法要には、全国各地から僧侶・ご門徒の方々が集まり、たいへん盛大に営まれます。北関東の各お寺では、十三日から十五日まで毎年お参りさせて戴いております。ご興味のある方は、是非ご一緒に参りさせて戴きませんか。

あつた事は想像に難くありません。それを毎年ご命日に併せてされたのですから、本当に命がけでなされた事でしようし、現に正安元（一九九〇）年十二月に京都から戻る途中、乗善房という方の要請により現大子町金沢の草庵に入り布教をしていましたが、やがて病床に臥し、翌正安二（一三〇〇）年正月四日にそ地で亡くなられました。

このように、親鸞聖人が亡くなられてから現在まで、七百五十年以上にわたつて毎年続けられてきた法要が、この「報恩講」であります。現在正念寺では、十一月十八・十九日の二日間昼夜席だけで行つておりますが、その昔（太平洋戦争が激しくなる以前）は通夜法要も行われており、遠くから来るご門徒がほとんどの拙寺では、本堂に火鉢で暖を取りながら、そして酒を酌み交わしつつ親鸞聖人の教えを語り合いながら、雑魚寝をして一晩を過ごされたと聞いております。



しんらんさま

(第六回)

親鸞聖人は、嘉禎元（一一三五）年頃に京都に戻られたと伝えられておりますが、京都に戻った理由は定かではありません。ただ、鎌倉幕府の出した「念佛者禁制」に触れる事から、関東を離れたのでは無いかとは言われております。また、京都に帰洛後も教行証文類への加筆を続けていたり、沢山の和讃をつくられた事などから、紙の手に入れやすさや、調べ物をする資料にも事欠かない都に戻られたとも言われます。

こうして六三歳前後に京都に戻られた親鸞聖人ですが、京都では何處で、どのようにして過ごされていましたか。「正明伝」によれば、「聖人跡を認みとめる」来るものうとして、或る時は二条富小路にましまし、或る時は一乗柳原、又は三条坊門富小路、河東岡崎、あるいは吉水辺りにもかくれ、清水などにも居たまえり。五条西洞院の禅坊は常の住居なり」とあり、住居を転々としていた事がうかがえます。その理由としては、弟子たちが聖人の住まいに訪ねてくる事もなんとなくおつくうだと書かれています。

それは、箱根まで同道していた性信房・蓮位房の二人が嘉禎元年冬の初めに見舞いに訪ね来たのを始め、門弟たちが次々と訪ねてきましたため、と「正明伝」には書いてあります。とは言え、「正明伝」にも書いてあるように、五条西洞院辺り（現大谷派光円寺）が常に住んでいる場所であつたようです。また、この時親鸞聖人を訪ねてきた蓮位房は、聖人が亡くなられる時までお側にいて、聖人の世話をしていたと伝えられており

こうして、京都に戻られた聖人は、一度書き上げられた教行証文類に、度々筆を加えております。その他にも、淨土和讃（一一八首）高僧和讃（一九首）正像末和讃（一六首）などもつくられ、また関東の門弟からの疑問などにも丁寧に返事を書かれたりしております。京都での生活の中心は、文筆活動であつたろうと推察されます。

さて、聖人が京都に戻った後の関東では、様々な問題が起こつてゐたと言われております。その一つに「悪人こそが救いの目当てである」という事を取り上げて、本来は阿弥陀如来の前での悪人である事を、道徳上の悪人と捉えて「悪い事をした方が良い」というような風潮が生まれていりました。こういった問題へ対処するために、聖人は息子「善鸞」を関東に向かわせました。聖人が、自分の名代として関東に派遣したという事は、善鸞に信頼を置いていた事が想像出来ます。

派遣された関東で「善鸞」が出会つたものは何だつたのか。これはあくまでも想像でしか有りませんが、いくら聖人の息子とは言え聖人本人で無いわけですから、門弟には聖人から直接教えを受けたといいう自負もあつたでしょうし、いくら「善鸞」が言つてもそれを聞き入れない門弟という構図が有つたのではないでしようか。そう考えると、「善鸞」が父親鸞から密かに本当の教えを授かつたと言い、関東の門弟を自分の方に向けさせようとしたのではないかと言う事も考えられます。

しかし問題だつた事は、「善鸞」の言つた事もまた聖人の教えからは外れていた事です。その為関東では更に混乱していきました。そしてとうとう「善鸞義絶」という事態になつていきました。聖人の亡くなる六年ほど前の出来事です。

次回は、親鸞聖人のご往生について考えてみましょう。



真宗大谷派光円寺

ます。（つづく）

初参り



8月13日にお参りです

安文子様
安里奈様
安咲耶様
安大志様
安尋美様

グランドゴルフ正念寺杯参加者募集

この度、正念寺主催でグランドゴルフ大会を行う事になりました。つきましては、経験者・未経験者を問わず、沢山の方のご参加をお待ちしております。

日程 平成三十年一月二十三日
集合場所 正念寺(午前九時集合)

会場 横川温泉 中野屋(常陸太田市折橋町1404)
参加費 三千円(プレー代・昼食・温泉入浴込み)

募集定員 四十名
連絡先 正念寺(〇二一九四一七六一〇五八)

※ なお、道具の無い方は、三百円で貸し出しあります。



東京教区仏教婦人会連盟結成六十周年記念大会

横浜で表題のような行事があります。参加されたい方は、正念寺までご連絡下さい。

開催期日 平成三十年三月二十七日(火)

会場 パシフィコ横浜 国立大ホール
講師 ケネス 田中師(武藏野大学教授)

やなせ なな師(シンガーソングライター)

有料ですが、現在金額の情報がありません

一、日程 五月三十日～三十一日
どうぞよろしくお願ひいたします。

寺院巡り旅行のお知らせ

この二年ほど前住職の葬儀・本願寺の伝灯奉告法要などで寺院巡りの旅行を中止しておりましたが、来年は今までのように一泊で行いたいと計画をしております。場所については、旅行社と相談中(十月一杯に概要を出すように言っていたのですが)なのですが、まだ決まってはおりません。一応、東京・横浜・千葉方面とは考えているのですが、宿泊や料金の事もあり現在のところ未定です。日程のみ決めましたので、今からその日を空けていただければ幸いです。

感謝録

ご寄付を戴きました事に感謝を込めてご報告させて戴きます。

一、父の永代経として

金 壱拾万円

井坂 照雄様

一、ストリートビュー掲載費用として

金 十八万三千六百円

住 職

今年も沢山のお仏供米をご奉納戴きました。

ここに謹んでご報告させて頂きます。

十一月五日現在

常陸太田市

井坂 孝一様

井坂 哲也様

井坂 照雄様

井坂 友之様

井坂 豊子様

井坂 浩一様

井坂 篤一様

井坂 達雄様

井坂 浩文様

井坂 光晴様

井坂 守様

井坂 義信様

井坂 昌邦様

仲村 関小蘭

平山 小蘭

会澤 浅川

樺村 樺村

小澤 樺村

萩野谷 樺村

吉澤 小澤

篠川 樺村

庄造 樺村

峻 様 定之様

國裕 様 喜一様

宏 様 和則様

利弘 様 欣也様

勤 様 勤様

喜一様 喜一様

定之様 喜一様

和則様 喜一様

那珂市

募集中

盆栽の剪定や植え替えなどの手入れをして戴ける方を募集しております。肥料分も無くなっているのではと思うのですが、何分全くわからないので、よろしくお願ひ致します。

常陸大宮市 坪井 誠 様

ご奉納戴きましたお仏供米は大切に使わせて頂きます。

その他、報恩講法要や永代経法要に際し、また常日頃から農業をされている方々から、いろいろな野菜などのご奉納も戴いております。ここに改めて感謝させて頂くと共に、ご報告申し上げます。

住職雜感

十一月の声を聴くと報恩講の時期がやつてきました、と感じます。毎年の恒例行事ではあります。報恩講は、親鸞聖人の御恩を通して、阿弥陀如来の（皆を救いたいという）ご本願に出会い法要でもあります。

本日（十一月五日）の時点で五ヶ寺の報恩講にお参りさせて戴きました。その内二ヶ寺では雅楽の演奏をさせて戴きました。一般的には、雅楽というと神社と結びつけられるようですが、七百五十二年の東大寺の大仏開眼法要で演奏されるなど仏教と関わりの深い音楽でした。雅楽の演奏で始まり、雅楽の演奏で終わっていく報恩講法要。今の気忙しい時代の中にシントリとした時間を与えてくれるものだなあ、と改めて思います。

雅楽の楽器を初めて持ち、吹き始めてからもう既に三十五年以上の時が経ちます。しみじみ自分でも年を取ったなあと思うのは、こうして過去を振り返った時です。

報恩講が終ると、年の瀬もすぐそこです。除夜の鐘の音を聴きながら、新年を迎える。また一つ年を取っていく。そんな季節ですが、命ある限り「南無阿弥陀仏」のお念佛に生かされている命である事を有り難くいただきたいものです。